

タイトル	資料紹介 三浦（堀田）綾子の「アララギ」掲載歌
著者	田中，綾；池田，和利；TANAKA, Aya；IKEDA, Kazuto
引用	北海学園大学人文論集(57)：226（一）-204（二三）
発行日	2014-08-31

資料紹介 三浦（堀田）綾子の「アララギ」掲載歌

田 中 綾・池 田 和 利

キーワード 三浦綾子、「アララギ」、土屋文明、『道ありき』、『この土の器をも』、歌集未収録

今年は、三浦綾子の代表作『氷点』発表から五〇年目にあたる。三浦綾子記念文学館での記念事業や、北海道文学館での特別展なども開催され、世代を超えて三浦作品が読み継がれていることをあらためて実感している。

作家デビュー以前の創作活動であった短歌について、公益財団法人北海道文学館編『資料情報と研究 201

3』（二〇一四年三月）に、田中綾「三浦（堀田）綾子の短歌——「アララギ」土屋文明選歌の考察」を執筆した。

その直後、三浦綾子の単行本未収録エッセイ四一篇を収

めた『ごめんなさいといえる』（小学館、同年）が刊行された。そこには、短歌に関するエッセイも収められており、偶然のこととは言え、三浦綾子の短歌を考察する好機ではないかと感じている。

三浦綾子の短歌の研究については、上出恵子氏による、「旭川アララギ会々報」発表の短歌の調査が何よりも大きな業績である。⁽¹⁾ その労作を補うかたちで、本稿では、地方組織である「旭川アララギ会」の母体であった「アララギ」本誌掲載の短歌を資料として提示したい。

「アララギ」掲載歌は、一九四九年から六一年までの全一七八首である。当初は旧姓「堀田綾子」での掲載であり、一九五九年一〇月号掲載作から、結婚後の「三浦綾

子」名となった。

のち、これら「アララギ」掲載歌は、三浦光世氏との合同歌集『共に歩めば』（聖燈社、一九七三年）にまとめられたが、この度の調査で、歌集未収録の作品が八首あったことがわかった。²⁾

また、自伝的小説である『道ありき 青春編』（主婦の友社、一九六九年）にも自作短歌が四三首引用されているが（うち三首は二回ずつ引用）、その中の二〇首は「アララギ」掲載歌である（うち二首は二回ずつ引用）。

その続編にあたる『この土の器をも 道ありき第二部／結婚編』（主婦の友社、一九七〇年）にも、自作短歌が一首引用されており、その中の九首が「アララギ」掲載歌であることも確認できた。

小説引用に際しての異同は本稿では示さないが、いくつかの異同があることは、前出の拙稿「三浦（堀田）綾子の短歌」でもふれている。³⁾

以下、資料紹介となるが、歌番号は便宜上のものである。また、初期作品は「旭川アララギ会々報」及び、誌名変更後の「旭川アララギ会報」「旭川アララギ月報」掲

(二)

載を初出とするものもあり、それらについては併記し、異同を傍線で示しておいた（旧字・新字の異同については特にふれない）。なお、「アララギ」本誌では選者による添削が慣例的に行われており、そのための異同である可能性もあることを付言しておきたい。

「旭川アララギ会々報」⁴⁾ 第一号（発行年月日不明）

夜半に歸りて寢着にも更へず寢る吾をこの頃父母は咎めずなりぬ

「アララギ」一九五〇年二月号 其二 土屋文明選

1・夜半に歸りて衣服も更へず寢る吾を此頃父母は咎めずなりぬ

※のち、『道ありき』一五章で引用。

「旭川アララギ会報」第四号（一九五〇年一月二八日）

凍りたる蜜柑を口に含み居れば俄かに熱き泪溢れ來ぬ
フオルマリンの匂ふ寢巻に着更へつつ心素直になりて
行きたり

「アララギ」一九五〇年四月号 其二 土屋文明選⁴⁾

2・凍りたる蜜柑を口に含み居れば俄かに熱き涙溢れ来ぬ

3・フォルマリンの匂ふ寢巻に着更へつつ心素直になりて行きたり

※3はのち、『道ありき』二二章で引用。

「旭川アララギ会報」第六号（一九五〇年七月一〇日）
病む君が三日かかりて書き呉れし葉書にあゝ冗談なども書いてある

「アララギ」一九五〇年七月号 其二 土屋文明選

4・病む君が三日掛りて書き呉れし端書にあゝ冗談等も書いてある

「アララギ」一九五〇年一〇月号 其二 土屋文明選

5・乾パンを食べる自炊生活も楽しきを歌に詠へば佗しげとなる

「旭川アララギ会報」第七号（一九五〇年八月二〇日）
いつの日か逢ふ事あらむ片目細める表情も俄かに悲し

きものとなりぬ（異同なし）

「アララギ」一九五〇年一二月号 其二 土屋文明選

6・いつの日か逢ふ事あらむ片目細める表情も俄かに悲しきものとなりぬ

「アララギ」一九五〇年一二月号 其二 土屋文明選

7・吾が髪をくすべし匂ひ満てる部屋にああ耐へ難く君想ひをり

「旭川アララギ会報」第一〇号（一九五〇年一月一二日）
二月九日霧が流れぬし夜のこと吾程憶えてゐては下さぬ君

「アララギ」一九五一年一月号 其二 土屋文明選

8・二月九日霧が流れ居し夜のこと吾程覚えてゐては下さぬ君

「旭川アララギ会報」第二一号（一九五〇年十二月三日）
カルテ一杯にドイツ語を書きなぐるこの医師も熱発の原因を語りて呉れず

「アララギ」一九五一年二月号 其二 土屋文明選

9・カルテ一杯に獨逸語を書きなぐる此醫師も熱發の原
因を語りて呉れず

「旭川アララギ会報」第二三号（一九五一年二月一日）

自から辿り行く過程か吾が歌を批評し呉るる事も稀ま
れとなりし君

朝霧に馬鉄のひづめが聞え来て君の張りある笑ひ声も
聴ゆ（異同なし）

「アララギ」一九五一年五月号 其二 土屋文明選

10・自ら辿り行く過程か吾歌を批評し呉るる事も稀まれ
となりし君

11・朝霧に馬鉄のひづめが聞え来て君の張りある笑ひ聲
も聴ゆ

「アララギ」一九五一年六月号 其二 土屋文明選

12・牛乳配達をして育ちたる吾なるに「お嬢さんね」と
言ふ友があり

「アララギ」一九五一年七月号 其二 土屋文明選

13・わが父を愛する氣持の曲折は心理學教科書に簡單
に分類されてありぬ

「旭川アララギ会報」第一六号（一九五一年五月二七日）

床頭の洗面器を鳴らして母を呼ぶ吾が細き手を君が見
てゐる

「アララギ」一九五一年八月号 其二 土屋文明選

14・床頭の洗面器を叩きて母を呼ぶ吾が細き手を君が見
てゐる

「旭川アララギ会報」第一八号（一九五一年七月一五日）

機嫌とられゑると知りつつ機嫌よく振舞ひし一時間た
だに疲れぬ

導かれつつ叱られつつ来し二年何時しか深く愛して居
りぬ（異同なし）

「アララギ」一九五一年九月号 其二 土屋文明選⁽⁵⁾

15・機嫌取られゑると知りつつ機嫌よく振舞ひし一時間
唯に疲れぬ

16・導かれつつ叱られつつ來し二年何時しか深く愛して
居りぬ

「アララギ」一九五一年一〇月号 其二 土屋文明選

17・戀へたき想ひにベッドに待ちゐれば汗拭ひつつ君入
り來る

「アララギ」一九五一年一二月号 其二 土屋文明選

18・部屋中に便器使ふはかく迄も淋しきものと思はざり
きに

「旭川アララギ会報」第二〇号（一九五一年九月一六日）
下着も着物もみな姉の古を着て露草亂るる土手に逢ひ
ゐる

「アララギ」一九五一年一二月号 其二 土屋文明選

19・下着も着物も姉の古を着て露草亂るる土手に逢ひ
ゐる

「旭川アララギ月報」第二一号（一九五一年一〇月二二日）

相病めば何時迄続く幸ならむ唇合はせつつ泪潑れき
「アララギ」一九五二年一月号 其二 土屋文明選

20・相病めば何時迄続く幸ならむ唇合はせつつ泪こぼれ
き

「旭川アララギ月報」第二三号（一九五一年一二月一六日）
五十才の社長夫人に何時もいつもコーヒを奢られて
ゐるあなたは嫌ひ

「アララギ」一九五二年二月号 其二 土屋文明選

21・五十歳の社長夫人に何時も何時もコーヒを奢られ
てゐるあなたは嫌ひ

22・母一人又冷飯を食べてゐるそれでは楽しい夕餉とな
らぬのに

※21はのち、『道ありき』二三章で引用。

「旭川アララギ月報」第二四号（一九五二年一月二〇日）
仰向きしままに紅刷く和田さんを泉さんが手鏡で見て
ゐる安静時間

「アララギ」一九五二年三月号 其二 土屋文明選

23・仰向きしままに紅刷く和田さんを泉さんが鏡で観て
ゐる安静時間

「アララギ」一九五二年四月号 其二 土屋文明選

24・喘鳴が漸く収まりし君の胸に三十秒程抱かれ別れ來
りぬ

「旭川アララギ月報」第二七号(一九五二年四月二四日)
しくは二〇日)

相病みてこのまま果つべし一度でも君に抱かれ臥たし
と想ふ

天理教の本より読まぬ母のこと夜半の目ざめに思ひて
ゐたり

「アララギ」一九五二年六月号 其二 土屋文明選

25・相病みてこのまま果つべし一度でも君に抱かれ臥し
たしと思ふ

26・天理教の本より読まぬ母のこと夜半の目醒めに想ひ
てゐたり

「アララギ」一九五二年七月号 其二 土屋文明選

27・平和よりも獨立よりも君が病狀は吾が關心事の第一
にして

「アララギ」一九五二年八月号 其二 土屋文明選

28・離れ病む君に書く時化粧する慣ひは何時の頃よりな
らむ

「アララギ」一九五二年一〇月号 其二 土屋文明選

29・英語多く混へて語るあなたの平和論それは雑誌「世
界」で私も讀みました

「アララギ」一九五二年一二月号 其二 土屋文明選

30・萩群るる彼方に牛が移り行き夕陽の丘に二人のみな
りき

「旭川アララギ月報」第三三号(一九五二年一〇月一七日)
「異性への伝道はむづかしいです」五十五才の西村先生
の言葉忘れられず

「アララギ」一九五二年二月号 其二 土屋文明選

31・「異性への傳道はむづかしいです」五十五歳の西村先生
の言葉忘れられず

「アララギ」一九五三年一月号 其二 土屋文明選

32・愛情かはた慾情か荒々と抱き給へば吾は淋しき

「アララギ」一九五三年三月号 其二 土屋文明選

33・ああ逢ひ度しとギプスの中に臥してゐぬあの廊下を
曲れば君の病室なのに

「アララギ」一九五三年四月号 其二 土屋文明選

34・何氣なくギプスベッドを叩き居しに氣づきて俄かに
淋しくなりぬ

「アララギ」一九五三年六月号 其二 土屋文明選

35・手術前のもつと優しかったと思ひ乍ら細くなつた君
の手を取る
・札幌⁶ 堀田綾子

「アララギ」一九五三年八月号 其二 土屋文明選

36・君とゐてなほも淋しきこの夕べ聖句幾つか胸に浮び
來
・札幌 堀田綾子

「アララギ」一九五三年九月号 其二 土屋文明選

37・淫賣も乞食も強盜も既に居き今と變らずキリストの
時代も
・札幌 堀田綾子

「アララギ」一九五三年十一月号 其二 土屋文明選

38・ベッドよりずり落ちさうな吾が蒲團を直して歸り給
ひしが最後となりぬ
・札幌 堀田綾子

※のち、『道ありき』三七、四〇章で引用。

「アララギ」一九五四年四月号 其二 土屋文明選

39・何を語りしか記憶も大方薄れたれど軽石多かりき斜
里の海岸

「アララギ」一九五四年六月号 其二 土屋文明選

40・病む友の一人一人の名を呼びて祈る聖畫の下に臥す

日々

※のち、『道ありき』四四章で引用。

「アララギ」一九五四年七月号 其二 土屋文明選

41・繰返し過去すゞゆきのみを想ふ日々病みて老いたる如くなり
しか

「アララギ」一九五四年八月号 其二 土屋文明選

42・しっかりと抱き合ひて居りたるに君のみ遂に遂に逝
きたり

43・雲ひとつ流るる五月の空を見れば君逝きしとは信じ
がたし

※43はのち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五四年九月号 其二 土屋文明選

44・君死にて淋しいだけの毎日なのに生きねばならぬか
ギブスに臥して

45・君逝きて日を経るにつれ淋しけれ今朝は初めて郭公
が鳴きたり

※二首とも、のち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五四年一〇月号 其二 土屋文明選

46・君が形見の丹前に刺しありし爪楊枝を見れば泪のと
まらざりけり

47・耳の中に流れし泪を拭ひつつ又新たなる泪溢れ來つ

※二首とも、のち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五四年一月号 其二 土屋文明選

48・闇中に眼開きて吾は居りひよつとして亡き君が現は
れてくれるかも知れず

※のち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五四年二月号 其二 土屋文明選

49・暖かき君の手と感じつつ醒む醒むればああ五ヶ月前
に君は死にぬき

「アララギ」一九五五年一月号 其二 土屋文明選

50・原罪の思想に導き下されし亡き君の激しき瞳めを想ひ

みつ

51・山鳩の鳴きゐる夕の丘なりき跪きイエスに共に祈り
き

※二首とも、のち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五五年二月号 其二 土屋文明選

52・幼子を撫づる如くに吾が頭を撫でて病室を出でて行く父

「アララギ」一九五五年三月号 其二 土屋文明選

53・妻の如く想ふと吾を抱きくれし君よ君よ還り來よ天の國より

※のち、『道ありき』四三、五一章で引用。

「アララギ」一九五五年四月号 其二 土屋文明選

54・丘に佇ち君に撮されし時もこんなに淋しい顔をしてゐたのか

同号 其三^⑦

55・君の寫眞に供へし蜜柑を下げて喰ぶるかかる淋しさ

は想ひみざりき

※のち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五五年五月号 其二 土屋文明選

56・握手して別れて行けば君は又君の生活に還りゆくべし

同号 其三

57・癪園の人らの爲に祈りつつ逝きしてふ死刑囚君の最期を聞きぬ

「アララギ」一九五五年六月号 其二 土屋文明選

58・さまざまの苦しみの果てに知りし君その君も僅か五年にて逝きぬ

同号 其三

59・キリスト村より屈きし卵を一つ一つ掌に載せてみき
ギプスに臥して

60・冷淡に交はり乍ら兄弟姉妹と呼ぶなりクリスチヤン
われらの世界

※58はのち、『道ありき』四三章で引用。

「アララギ」一九五五年七月号 其二 土屋文明選

61・コルセットを着て漸くに立つ吾を亡き君の寫眞が見てゐて下さる

同号 其三

62・椅子より立ちて何か云はむとする表情しばらくにして又坐りたり

63・平靜に平靜にと振舞へど夏みかんの皮をむく時指がふるへき

「アララギ」一九五五年八月号 其二 土屋文明選

64・君が逝きし午前一時を廻らねば睡られぬ慣ひに一年過ぎつ

65・女よりも優しき人と云はるれど主張曲げし事は君になかりき

※64はのち、『道ありき』四五章で、65は同四三章で引用。

同号 其三

66・齋藤茂吉の随筆を贈りくれし君ドイツ語は皆欄外に譯し下されてゐき

「アララギ」一九五五年九月号 其二 土屋文明選

67・五年ぶりにて下駄を履きにき土の上にああ生きてわたしは立つてゐる

68・青く透くビニールの布を胸に敷き膳を待ち居れば郭公の聲

「アララギ」一九五五年一〇月号 其二 土屋文明選

69・苺ジュースを一口飲みてさりげなく話題を變へしに氣づきて居りぬ

同号 其三

70・亡き君の澄みたる瞳を想ひつつ人に手を取られ吾がゐたりけり

71・年下の君に優しくもの言ひて吾の心の落着きてゆく

「アララギ」一九五五年一一月号 其二 土屋文明選

72・獨房より見たる花火の美しく悲しかりしと書きて來りぬ

同号 其三

73・胸に載せて食ふる四年に吾が乳房肉づきてまろくま

ろくなりたり

74・四年振りに聞く叔父の聲暫しして吾を見舞はず歸り
行きたり

「アララギ」一九五五年二月号 其二 土屋文明選

75・赧くなつて道子さんを見てゐる君の顔をわたしは横
からじつと視てゐる

「アララギ」一九五六年一月号 其二 土屋文明選

76・生けるごと微笑む寫眞の君に向ひ話しかけゐし吾に
氣づきぬ

同号 其三

77・素直な少年と云はるる汝のやすやすと嘘つく事を臥
す吾は知る

「アララギ」一九五六年二月号 其二 土屋文明選

78・どの様な未來となるかはわからねど二人のみに通ず
る言葉も出来ぬ

「アララギ」一九五六年三月号 其二 土屋文明選

79・苦しみて顔歪むれば君も同じ表情をして吾を見守る
同号 其三

80・受話器を耳に強く押し當てて今ぞ聞く遙なる菅原先
生の張りある御聲

「アララギ」一九五六年四月号 其二 土屋文明選

81・わが傍らに版畫を刷りてゐし君が不意に獨りごとを
言ひ給ふなり

「アララギ」一九五六年五月号 其二 土屋文明選

82・伸ばしかけし髪に手をやる少年の思ひがけなく淋し
き瞳に會ひぬ

同号 其三

83・肉厚き君が手を雙手にはさみつつ揺ぐ心を押し鎮め
ゐつ

「アララギ」一九五六年六月号 其二 土屋文明選

84・次々と強き言葉を吐く彼の時に自信なき表情となる

を吾が見つ

「アララギ」一九五六年七月号 其二 土屋文明選

85・洗濯を終へたる汝の寄り来れば粧はぬ頬がかすかに
匂ふ

「アララギ」一九五六年八月号 其二 土屋文明選

86・夢にさへ君は死にゐき君の亡骸を抱きしめてああ吾
も死にゐき

同号 其三

87・父母に祕して血を咯くこの夜の部屋の空氣は蒼く見
ゆるも

※86はのち、『道ありき』四三章で引用。87は同四六章
で引用。

「アララギ」一九五六年九月号 其二 土屋文明選

88・祈らむと組みたる吾が手の熱くして今日一日の罪甦
る

同号 其三

(一一)

89・勤めに行く者なき吾が家の遅き飯それより更に遅く
吾が食ふ

「アララギ」一九五六年一〇月号 其二 土屋文明選

90・繼子ではないかと疑ひし少女にてドストエフスキイ
の名を知り初めき

同号 其三

91・わが母に優しき言葉かけ給ふ君の傍へに涙ぐみみつ

「アララギ」一九五六年一二月号 其二 土屋文明選

92・ギブスベッドに臥すのみにして吾の手の一日終れば
いたく汚れつ

「アララギ」一九五七年一月号 其二 土屋文明選

93・祈ること歌詠むことを教へ給ひ吾を残して逝き給ひ
たり

同号 其三

94・ギブスベッドに五年臥し來て吾が首の曲らざるまま
癒えてゆくらし

95・美しき雄鹿の聲の録音をひとり聴きみつギブスの冷ゆる夜

「アララギ」一九五七年二月号 其二 土屋文明選

96・朱き房下げたる被布を着て行きし小學校入學式を想ひいでみつ

同号 其三

97・教會の歸りに寄り給ひ臥す吾の傍へに君は辨當を開く

98・散歩する爲にと買ひ呉れし紫の草履を仕舞ひて今年も臥しぬ

「アララギ」一九五七年四月号 其二 土屋文明選

99・笑ふ如く笑はぬ如く寫り居り何と曖昧な表情のわたし

同号 其三

100・炭塵に濁れる川の流るる街神威^{かもゑ}の二年は唯に戀しき

「アララギ」一九五七年五月号 其三

101・兩膝を固く揃へて坐る吾の髪の亂れを直し呉るる君

「アララギ」一九五七年六月号 其二 土屋文明選

102・病院の様な匂ひがすると言ふ吾が部屋^{へや}の匂ひに吾は氣づかず

同号 其三

103・湯のたぎる音か耳鳴りかわからぬを儚がりつつ靜臥に入りぬ

「アララギ」一九五七年七月号 其二 土屋文明選

104・死んだとばかり思つてゐましたと亡き君の手を取り泣きし時その時覺めぬ

105・「信仰で頑張れ」と遺言し給ひし君よわたしは人を愛しました

同号 其三

106・友が多しと羨まれるれど健かな頃は一人の友もなかりき

「アララギ」一九五七年八月号 其二 土屋文明選

107・愛想がよき故商人に向くと言はれ今日の一日はいたく寂しき

「アララギ」一九五七年九月号 其二 土屋文明選

108・土に寫れる自分の影をしみじみとみつめることなど何年ぶりか

同号 其三

109・君のバイクの音かも知れぬと待ちて居りギブスの中に身を固くして

「アララギ」一九五七年一〇月号 其三

110・前髪の垂るれば忽ち亡き君によく似る君を吾は愛しぬ

「アララギ」一九五七年一一月号 其二 土屋文明選

111・あした咲く朝顔のつぼみを數へ居りどこかでオルゴールの鳴つてゐる午後

同号 其三

112・襖のかげより君現はれよ君よ君よ癒えて綾子が訪ね

來りしに

「アララギ」一九五七年一二月号 其二 土屋文明選

113・幸福さうに君と並びて寫りゐる吾の笑顔に寂しくなりぬ

同号 其三

114・鉢の葉蘭を一枚一枚拭ひ居て不意にたち來る君の面影

「アララギ」一九五八年一月号 其二 土屋文明選

115・飾りある學生姿の亡き君の寫眞を何處の子かと訊かれぬ

同号 其三

116・骨の如しと云はれし細き己が手を泡立つクレゾールに靜かに浸たす

「アララギ」一九五八年二月号 其三

117・暗みたる外に氣づきて父と母の臥れる部屋に灯をつけに行く

118・十一月十六日四度めぐり來ぬ雪のかの日が最後なり
にき

「アララギ」一九五八年三月号 其二 土屋文明選

119・絶えまなくかかる電話にそれぞれに聲使ひわくるを
臥して聴きあつ

「アララギ」一九五八年四月号 其二 土屋文明選

120・雪の中歸り行く君振り返り少年の如く高く手を上ぐ

同号 其三

121・視線放さず見つめ給ふを蔑みのまなざしとのみ吾は
思ひき

「アララギ」一九五八年五月号 其二 土屋文明選

122・君に似し人を君と間違へし事が暫しして悲しみとな
る

同号 其三

123・へばりつきし如く動かぬ冬の雲何かがこれから始ま
る如く思へり

「アララギ」一九五八年六月号 其二 土屋文明選

124・粉ミルク湯にとけゆくを待ち乍ら忘れたきこと又思
ひあつ

125・平凡な事を平凡に詠ひつつ學びしは眞實に生きると
いふこと

同号 其三

126・早く死にたしとふ口癖は同じにて不倅せな姉は四十
八歳となりぬ

「アララギ」一九五八年七月号 其二 土屋文明選

127・癒えぬまま果つるか癒えて孤獨なる老いに耐へるか
吾の未來は

128・人間は日々に老い行く者とある化粧品の記事を讀み
返しあつ

同号 其三

129・酔の匂ふ飯をあふぎつつ今宵わが告ぐべき事を思ひ
ぬ

130・日の沈む位置の移りを記すのみかかる平凡なるわが
日記

「アララギ」一九五八年八月号 其二 土屋文明選

131・癒やされて吾が出でて來し街中に路に苗木賣る店が
續けり

同号 其三

132・梅の實にて作りし鈴を鳴らしつつ朝の目覺めを暫し
ゐたりき

「アララギ」一九五八年九月号 其二 土屋文明選

133・人よりも暖かき手を持つ自が手の細く蒼きをしみじ
みと見つ

134・年上の病める女を愛するは寂しき事と思ひ給はずや
君

同号 其三

135・君の御骨を守る御堂みだうのカーテンに繼の當れるをさび
しみて見つ

「アララギ」一九五八年一〇月号 其二 土屋文明選

136・花の咲くことなく終るダリヤをば朝あさ縁に立ちて
見るかも

同号 其三

137・パルプ廢液の酸ゆき匂ひは同じにて牛朱ウシユベツ別川に八年
ぶりに來つ

「アララギ」一九五八年一二月号 其三

138・八百屋の前に西瓜を降し終るまで朝の屋上に吾は見
て居り

「アララギ」一九五九年一月号 其二 土屋文明選

139・エレベーターの壁にもたれてボタン押し夜の屋上に
獨り昇り行く

同号 其三

140・相共に祈る午後九時縫ひかけの布をたたみて灯を消
しにけり

「アララギ」一九五九年二月号 其二 土屋文明選

141・法事より持ち歸りたるもの食べてわれら四人の夕食
は終りぬ

同号 其三

142・君の兄上のバイクに送られてゐる今が倅せいふものかも知れず

「アララギ」一九五九年三月号 其二 土屋文明選

143・「さやうならなどと言はないで」と書きあればたやすく崩るる吾が心かな

同号 其三

144・吹きつくる雪に逆らひ歩み行く君と初めて街に出て来て

「アララギ」一九五九年四月号 其二 土屋文明選

145・拍手されてゐるわたし達婚約のしるしの聖書を取交しつつ

「アララギ」一九五九年五月号 其三

146・「夫には主の如く仕へよ」とふ聖句ありて朱線太く印して讀みぬ

147・あざやかに林檎の皮をむき給ふ君は如何なる夫となるらむ

同号 其四⁽⁸⁾ 土屋文明選

148・いつ來ても人氣なき北大病院温室の石の長椅子に腰を下ろしぬ

「アララギ」一九五九年六月号 其二 土屋文明選

149・信仰の歌作らぬを指摘され歌作ること少なくなりぬ

「アララギ」一九五九年七月号 其三

150・未だ芽吹かぬアカシヤに寄りて目をつむるかくれんぼの鬼のわたしは

「アララギ」一九五九年一〇月号 其二 土屋文明選

※この号から「三浦綾子」名。

151・浴衣着て共に歩めばしみじみと結婚したる吾等と思ふ

152・ひる寝るを罪の如くに思ひつつ臥す哀れさを嫁ぎて知りぬ

同号 其三

153・幾度^{いくたび}か夕茜雲を振り仰ぎ夫に寄り添ひ歸り來りぬ

154・病む吾の手を握りつつ眠る夫眠れる顔も優しと思ふ

※151・152はのち、『この土の器をも』四章で引用。153は
同一一章で引用。

働きぬ

「アララギ」一九六〇年一月号 其三

160・病む夫を一人残して眞ひるまの街に出で来つ風に吹

かれて

※のち、『この土の器をも』一章で引用。

「アララギ」一九五九年一月号 其二 土屋文明選

155・病む夫の傍へに坐り思ふこと夫知らぬ過去の私のこ
と

同号 其三

「アララギ」一九六〇年二月号 其二 土屋文明選

156・電氣器具の揃へる厨に働きてある時さびしと思ふこ
とあり

161・夫の顔を兩手に抱きてくちづけぬ共に短き命と想へ
ば

157・父母の晝寝してゐる家に來て用なき電話を吾はかけ
るつ

※のち、『この土の器をも』一章で引用。

※155はのち、『この土の器をも』一章で引用。

「アララギ」一九六〇年三月号 其二 土屋文明選

「アララギ」一九五九年二月号 其二 土屋文明選

158・結婚後も變る事なき寂しさに十年續けし日記をやめ
ぬ

163・暗き海吹きつける雨猫の聲十年前の自殺未遂の夜の
印象

同号 其三

159・いささかの事に諍ひしを思ひつつ常より忙しく立ち

164・白魚の様ななどと古風なる表現をして手を求め來る

男なり

※162はのち、『この土の器をも』二一章で引用。

「アララギ」一九六〇年四月号 其二 土屋文明選

165・又來ると別れしものを何故に逝きし君よ君の葬式に
わたしは行かない

同号 其三

166・首曲げてみつむる夫の表情の亡き君に似るを今日は
怖れつ

「アララギ」一九六〇年五月号 其二 土屋文明選

167・遠い黄色い空が鏡に寫りゐて事多かりし今日も暮れ
たり

同号 其三

168・ライラックの蔭に寫りてゐる二人戦争を生きのびて
のちに死にたり

169・機關銃と戦車のポスターをバックにし吾ら教員二十
一名の寫眞あり

「アララギ」一九六〇年六月号 其二 土屋文明選

170・金持に金貸し貧乏人に金貸さぬこんな世の仕組みさ
へ知らず生き來ぬ

同号 其三

171・雪の上に雨降る街へ仕上りし夫の着物を取りに出で
來つ

172・屋根裏の病室に夫を一人置き雪だけの道を歸り來り
ぬ

173・今日よりは吾一人暮さねばならぬ吾が家の前に來り
て佇みて居り

174・この家の中にもう一組の夫と吾がある様な氣がして
暫し立ち居り

「アララギ」一九六〇年七月号 其二 土屋文明選

175・賣られし馬路に死にし馬夫が語る少年の日の思ひ出
優し

同号 其三

176・火山灰地の續く向うに輝きて煙上れる樽前山見ゆ

177・雪原とまがひしは銀色の沼にして枯葦原をわが汽車

は行く

※178はのち、『この土の器をも』二一章で引用。

「アララギ」一九六一年一月号 其二 土屋文明選

(20)

不願草灯につやつやしやうやくに誰も彼もを凝しづみたる
 〇 〇 鹿見島 石神 静雄
 井戸端に積洗ふ音の聞ゆるは婆訶は語にするつもりらし
 〇 〇 鹿見島 神山 南星
 復活を祝ふ我らの讃美歌にマクセーさんも英語を和す
 〇 〇 宮崎 荒井 興十郎
 石井十次の奥津城を若き妻に教へ高きすきの道を下りぬ
 〇 〇 宮崎 芳賀 日出男
 たえまなく風雨より吹き来る河原に居れば口笛きこゆ
 〇 〇 宮崎 森 若松
 縋帯を干さむと妻は部屋に張る舌の會つての捕縄見つけて
 〇 〇 愛媛 大久保 福太郎
 日に幾度か苗ひきに來る私を同業者が店先から妬ましく見る
 〇 〇 高松 西村 實太郎
 木の芽だちつんとして勢へこの時の静けさを好む
 〇 〇 香川 藤川 幸助
 教員君らの要求書へど事業税一割増徴には吾らが困る
 〇 〇 旭川 前川 正
 ネットイを結び直して呉る時近々と運搬が匂ふが如し
 〇 〇 旭川 堀田 綾子
 牛乳配達をして言ちたる音なるに「お嬢さん」と言ふ友が
 〇 〇 帯廣 七谷 重朗
 雪消水しだいに澄みて湛へつつ枯庭之を深くひたしぬ

①「アララギ」一九五一年六月号
 本稿での歌番号は「12」(四頁)

(81)

三月の風は雨にまはりゐてオルガンをつひくうなじにさける
 〇 〇 岐阜 三原 鈴子
 一日に幾度も天候變るとふ運羅の山に朝日差しきぬ
 〇 〇 岐阜 水野 悦子
 病後五年節度量の増えざりき農を止めむと思ひ始めぬ
 〇 〇 北海道 渡邊 雅生
 眼力より衰ふる老を妻もいふあはれ同じき歎かひにして
 〇 〇 旭川 樋口 作太郎
 冬籠り飯屋も過ぎて室内に顔散らばらせ長閑み始む
 〇 〇 旭川 堀田 綾子
 早く死にたしとふ口癖は同じにて不傳せな婦は四十八歳となりぬ
 〇 〇 根室 及川 高行
 わが臥せる床下にして雪解の水の流れる虎き音する
 〇 〇 青森 佐藤 玉治
 ためらひつつ我に告げ恋へ歎し居る故を促し茶房を出づる
 〇 〇 盛岡 堀内 雨虹
 浮城もその影落す岩手嶺の雪はひととき暫染む
 〇 〇 盛岡 浦田 啓堂
 試みに多讀ひせぬ番帳の空澄消えればのつきをとり
 〇 〇 盛岡 石上 りつ
 とりどりのペカフ並ぶ部屋すみのそのひそけき杖一選ぶ
 〇 〇 一関 新妻 木人
 笹むらに濡れ日したるひとときを灯のつきし加藤の明むり
 〇 〇 宮城 大槻 平七
 眞白なる雪の盛王に春日てりて山麓の影はづかに見ゆる
 〇 〇 仙臺 大平 千枝子

②「アララギ」一九五八年六月号
 本稿での歌番号は「126」(一五頁)

へ歌集未収録歌八首の図版へ作者名の後に作品

178・椎茸も芋も大根も裏山より今採り來しを今食ぶる
 なり

(110)

七月集 其二

土屋文明選

(17)

○ 憶万木君 別府 金石淳彦
 客離畢者の一人のみと河上藤をわが脱しめき君に告へて
 誤解して吾を親しき氣付かき出で征まし事もわが知らざりき
 失望し離れゆくさま氣付かき出で征まし事もわが知らざりき
 ○ 大田山 本和夫
 雲仙のながながしき裾今日も青し三十年ははやくも過ぎて
 海にむかひ低くなる寒田の早き穂の風標はみちに増しだかれつ
 ○ 熊本 津田治子
 肌より沁入るべきむなさにながらあるとき、傍の夫
 フレームに多を越えたる漬木箱をうるはふよひ窓の外
 再婚を祖母に薦められ送り贈し昭和十年の母の日記出づ
 新しき紺の袴を吾に著て母の見合に連れてゆかれ
 ○ 高尾島 加治木 一洋
 病に吾にひきかき自毀強ひたりし父を鬼の如く恐れぬたりき
 母なきあゝ願病ひ吾にわが父はことさらやさしくなり給ひけり
 ○ 堀田 綾子
 いまはまですに世故かけぬきびしき口あけて慈に今ぞ安く
 吾に知らず妹に最後の傘くれきいまはまて父と妹ひ合ひき

○ 仙臺 三宅 奈緒子
 癒えぬまき果つるか癒えて孤獨なる老いに耐へるか吾の未来は
 人間は日々老いて行く者である化粧品の記事を読み返らぬ
 ○ 土浦市 毛 豊備
 ひとを養はずぐれば巷にあふれたる春の野草の目に沁むるかも
 ゆきて逢はむと一途のことは幾日を遣ひし心まに観るなり
 ○ 利根川の夕明りに河原ひきかへし三人中の片井田君に
 この願ひつづまりとよりある不衛生に流るる霧集くして
 ○ 東京 大 岡 亮
 冬のかへで伸々なりもち素の過ぎに色も悪く思はゆ
 花迎露の淡き雲の追憶に羽根の端の夕映
 ○ 東京 小金井つや子
 照得て雨の一日坐りをれば庭のさくらも身等の來たる
 我が部屋も朝日さすかと輝ける日を光をもちまもりたり
 ○ 東京 鈴木 木 順
 かたくりの花にやかに立ちたまたま世をそのむ柄も木もも
 枕べにひては露華をひかしむる夢みやけらくる日もありぬ
 ○ 東京 西山 信 作
 さまよふは支那の巷のいづこなりや夢に苦しくいくとも見る
 煙草斷ちてひと二食の年暮るの形に儼しむいくばくの酒
 ○ 東京 佐藤 信 英

③「アララギ」一九五八年七月号
 本稿での歌番号は「127」「128」（一五頁）

○ 徳島 駒 木 悠二
 吾が心今は頼まりきにしと桑の葉の光る丘のぼりきぬ
 野の道を覗きつづけ夫の歸りくる雲ふらす多のすしこひを
 乾きたる空雲の中に霞につくマスクをすればやや集になる
 有刺鐵線にて圍める中の白林荘がける芝生にひたき集になる
 ○ 徳島 駒 木 悠二
 幼きより喜しみたりいくつものその大刀は母に言はざりき
 移り来てはや一年とわが歩む街は眉山の影となりき
 吾ら新し住まむ家に乾かぬ襪にコートを着す
 東京に今があるといふゆゑに何ゆゑあむらぎも心安きか
 ○ 北条 三
 目にしむ川岸の雲のかたひににげしたるの浪わたる
 砂をまき風吹きける露をまきける雪映に入り行く
 朝明より雪消す風の吹き出でて島嶼の山雨にならし
 駒と吾に冬の月あまなくて幾は深く都府に
 ○ 旭川 三浦 綾子
 雪の上に雨降る街へ仕上りし夫の着物を取りに出で來つ
 屋根裏の納室に夫を一人置き雪の道を歸り來りぬ
 今日よりは吾一筆さねならん吾が家の前に來りて待つ居り
 この家の中にも一組の夫と吾がある候と氣がして暫し立ち居り
 ○ 弘前 近 藤 憐 憐
 赤鉛筆いくたびか床に取り書き正はけむかへる墨に
 鳥威の信肩の如く光り坂下夜の田のしづもぬ
 颱風のあとを雨降るこの草原に白き蝶ふし
 ○ 仙臺 三宅 奈緒子
 うすあきみづの潮に小鳥の鳴くに苦して歸りゆく砂捲く風のなか
 別るまでの経緯おもへば苦して歸りゆく砂捲く風のなか

④「アララギ」一九六〇年六月号
 本稿での歌番号は「171」～「174」（一九頁）

注

(一一)

- (1) 「資料紹介」旭川アララギ会々報「目次一覧」(活水学院日本文学会「活水日文」二四号、一九九二年三月)、「旭川アララギ会々報」における三浦綾子の短歌その他(「活水女子大学・短期大学」活水論文集「三六号、一九九三年三月」)。本稿の「旭川アララギ会々報」及び誌名変更後の「旭川アララギ会報」「旭川アララギ月報」の短歌は、右からの引用である。なお、これらの短歌はのち、漢字表記を改めて上出恵子氏の『三浦綾子研究』(双文社出版、二〇〇一年)に収録されている。
- (2) 具体的には、12、126、128、171、174の歌である。巻末に、図版で示しておいた。
- (3) たとえば、初版である『道ありき——わが青春の記——』(主婦の友社、一九六九年一月三二日発行)と、普及版である文庫版『道ありき(青春編)』(新潮文庫、一九八〇年発行 本稿では一九九九年六月二〇日発行の四九刷を使用)を比べると、旧かな・旧漢字を新かな・新漢字に直したり、ルビなどに異同が見られる。ルビはおそらく読者に配慮してふったものもあるのだろう。
- (4) 「其二 土屋文明選」は、全国の会員が葉書に五首(のちに三首)以内を書いて投じ、選出される欄である。三首、一首が採られ、当初、掲載順は土屋文明の選歌眼になかった順序であった。この号で堀田綾子は二首採られ、しかも、七八人中八六番目の掲載であり、新人ながらひじょうに評価されていたことが窺える。
- (5) この号以降、地域別の掲載順となった。のち、二首掲載については土屋文明による順位づけとなしたが、一首の場合は地域別の掲載順として定着した。
- (6) それまでは「旭川 堀田綾子」名であったが、この年二月に旭川日赤病院から札幌医科大学附属病院に転院したため、六、一一月号は「札幌」の住所表記となっている。
- (7) 「アララギ」巻末の「其三」は、五味保義を中心とする編集部による選歌欄であった。全国の会員の各六首、一首が掲載され、その月の秀作選といった印象である。一九五七年七月号までは、特に選者名の記載はなかったが、同号から、複数の選者名が明記されるようになった。五味保義のほか、小暮政次、柴生田稔、吉田正俊、落合京太郎らが選にあっていた。
- (8) 「其四 土屋文明選」欄は、「其二 土屋文明選」に投稿されたが、「頁数其他の關係で本欄にのせ切れなかったが、なほ捨ててしまふのに惜しいと思はれるもの」(「アララギ」

一九五九年五月号）の欄で、地名記載はなく、作品と氏名のみ小さな活字で掲載されている。

（9） 事情は不詳だが、『三浦綾子全集』第一七卷（主婦の友社、一九九二年）所収の『共に歩めば』には、以下の三浦綾子「一九六一年」作品三首が未収録である。

椎茸も芋も大根も裏山より今採り来しを今食ぶるなり

石多き畑に人は苦しめど四囲の官林豊に茂りゐき

林間鉄道のありたる道と夫に聞き明るき林に入りて行くなり